

見えない壁を乗り越えて

村上市立村上第一中学校 3年 佐藤 朱莉

「私は障がいをもっています。配慮と支援をお願いします。」という意思を示す、ヘルプマークをつけた男性は、私が乗る電車に頭を抱えながら乗り込んできた。荒い呼吸でしゃがみ込み、落ち着かない様子で時折何かつぶやいている。テレビで見て知識はあったものの、私が普段接している人たちとあまりに異なる様子に、私は恐怖を感じてしまった。

しばらくすると、10人を超える外国人の家族が乗車してきた。「公共の場では静かに」が日本人のセオリーだが、旅行に訪れた外国人の一行は、楽しい雰囲気全開で会話をしている。私は、少なからず不快に感じていたため、小さな子どもが座席に座れず立っていたことに気付かなかった。

「アリガトウゴザイマス。」

外国人の一人が、片言の日本語でそう言いながら深くお辞儀したとき、私ははっとした。見ると、ヘルプマークをつけた男性が、外国人の子どもに席を譲っていた。そして彼は、鞆から絵本を取り出し、子ども達に読み聞かせをはじめたのだ。外国人の子ども達は目を輝かせて彼の語りに聴き入り、絵本を指さして笑っていた。

私にはその光景が、なんだか素晴らしい景色に見えた。どうして私はこの人を怖いと思ったのだろう。どうして私は外国人のことを不快に思ったのだろう。そう思って振り返ったとき、私の中に「障がいをもっている」「文化が違う」という無意識の差別心があったことに気付いた。私は自分の心の狭さが恥ずかしく、その場から逃げ出したい気持ちになった。そんなとき、私の目に留まったのは、幼い子を抱っこして立っている外国人の女性だった。その瞬間、私の中になんだか大きな力が湧いてきて、「どうぞ。」と席を譲ることができた。外国人の家族は、ヘルプマークの男性同様に、私に「アリガトウゴザイマス。」とお礼を言ってくれた。

私は生まれて初めて自分を誇らしく思えた。人は心の中に無意識の差別心をもっていて、自分と異なるものを遠ざけたがる。でも、人はまた心の持ち方一つで、その差別心を克服することができる。そう気付いた出来事だった。あのヘルプマークの彼の行動が、私に人として大切なことを教えてくれたのだ。

今年の春、修学旅行で訪れた東京築地市場で、「Excuse me」と外国人旅行者に声をかけられた。怖かったが、もう一人の自分が背中を押してくれたような気がした。

「May I help you?」

自分がこんな大胆なことができるなんて、信じられなかった。同時に、心の底から湧き上がる喜びを感じた。私のつたない英語がどこまで通用したのだろう。でも、外国人の彼は終始笑顔で、私に握手を求めてきた。自分の英語力不足を痛感したものの、壁を乗り越えて人と繋がったことに、私は何とも言えない心地よさを感じた。

外見、国籍、経歴や生まれた場所……自分と違うといって、人は差別的に見てしまう。ヘルプマークの男性を前にして、私はそんな自分の弱さを恥じた。でも、その弱さは誰にでもあるもので、見えない壁は誰もが作ってしまうものだ。先生が「知即愛」という言葉を教えてくれた。「人を知ろうとすることは、愛することに繋がる」という意味だという。見えない壁の向こうにいるのは、あなたが決めつけたような人ではないと思う。だって、私が勇気を出して乗り越えた壁の向こうには、あんな素敵な人たちがいたのだから。

私は英語を本格的に勉強しようと思う。私にもっと言語力や関わる力があれば、偏見や差別の壁を容易に乗り越えられるから。私は今、世界中の人たちに、壁を作っているのはあなたなのだと伝えたい。そしてその壁と一緒に乗り越えようと背中を押してあげたい。そうやって人間の弱さと関わり続けられる、強い心を持った大人に私はなりたい。